

社会に仕える①：

- 1) 牧師や信仰の先輩が、献身したいという学生に対して、「まず、しっかりと勉強しなさい。」と言われたら、どう思いますか？その意見は正しいと思いますか？
- 2) 学校や職場で、先生や上司のしていることが、間違っていると感じる時に、神の御心はどこにあるのでしょうか？

「主に従うように」ペテロ第一 2 章 11 - 25 節（エペソ 6 章 5 - 9 節）

- 1) 神の恵みの選び
- 2) 自由を服従に

ペテロ第一 2 章 11 - 25 節 「異邦人の中での立派な振る舞い」

1A 肉欲からの忌避 11-12

2A 王への尊敬と服従 13-17

3A 主人への心からの服従 18-20

4A キリストの模範 21-25

本文

私たちはこれから、「社会に仕える」というテーマで学びをしていきます。セッション1の今晚は、「主に従うように」ということです。これはエペソ 6 章 5 節から来ている言葉で、こう書かれています。「奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。」私たちはもちろん、教会において、キリスト者の間においてであれば、キリストに従うということは理解できるでしょう。そして、教会の外においては、キリストの福音を伝える、または証しを立てるといふことであれば理解できるでしょう。教会においては主に仕え、世に対しては伝道するという軸があります。けれども、第三の軸があるのです。それが、「主人に仕えながら、キリストに仕える」です。仕事をしている時、あるいは大学で勉強をしている時に、その環境がキリスト教のそれだけでなく、それでも神は、あなたはキリストに仕えているのだよ、という励ましを与えておられるのです。

私たちが取り組む聖書箇所は、ペテロの手紙第一 2 章の後半、11 節以降です。この手紙は、ペテロが小アジアにいるキリスト者たちに対して書いたものです。おそらく使徒パウロが殉教した頃に、残されている者たちに迫害下にあっても耐え忍ぶことができるように、励ましの手紙を書いています。そうした圧迫の中で、あなたがたはキリストの栄光の中で生きることができることを励ましています。一見、惨めに見えるような状況の中で、ペテロは、「いや、あなたには栄光の御霊が留まっているのだよ。(4:14)」と教えています。

2章において、キリスト者がどのような存在であるかを何度となく、説明しています。まず5節には、イエス・キリストを礎石として私たちは霊の家であり、その家に仕えている聖なる祭司であるということです。それから9節、選ばれた種族、聖なる国民、王である祭司、神の所有とされた民であることを述べました。私たちへの神の恵み、その特権はとてつもなく大きなものがあります。その恵みによる選びがあつて、私たちは驚くべき福音を人々に伝えるのです。そして11節からですが、ここからが「社会に仕えるキリスト者」の姿が描かれています。基本的に彼は、異邦人の間にあって立派に振る舞いなさいという勧めを行っていきます。

1A 肉欲からの忌避 11-12

11 愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。12 異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。

私たちが、選ばれた民、聖なる国民、王なる祭司、神の所有の民であります。その神の選びの背後には、神の愛があります。神が愛されたからこそ、私たちを、その行ないとは別に選ばれたのです。それでペテロは、「愛する者たちよ」と呼んでいます。もちろん、ペテロも彼らに兄弟愛を抱いています。その彼の愛と、神から来る愛が彼を通して流れ出て、「愛する者たちよ」と呼んでいます。

そのように選ばれ、聖め別たれた民なのだから、地上においては「旅人であり寄留者」であります。この世に住んでいますが、この世に属していません。神に属しており、国籍は天にあります。したがって、ここでは一時的な住まいであり、もちろん不便を強いられながら生きています。キリスト者が、地上においてキリスト者として生きるのは快適ではないのです。ここは霊的には、外国の地であり、寄留者として生きています。ペテロは、ユダヤ人への使徒ですから、おそらくこの旅人や寄留者を、アブラハム、イサク、ヤコブのような族長のことを考えていたことでしょう。天幕生活をしており、定住していなかった。所有の土地は、僅かにヘブロンにサラの埋葬のために購入したものしかありませんでした。私たちもそうである、ということです。

ですから、ここに社会の中に生きる私たちの姿があります。私たちに対する、社会における神の御心を思うにあたって、大事なのは「今、自分の置かれているところは一時的であり、過ぎ去るのだ」ということでもあります。天に国籍があるのですから、地上における事柄は身軽に接していく必要があります。パウロは、コリント人への手紙第一でこう言いました。「7:29-31 兄弟たちよ。私は次のことを言いたいのです。時は縮まっています。今からは、妻のある者は、妻のない者のようにしていなさい。泣く者は泣かない者のように、喜ぶ者は喜ばない者のように、買う者は所有しない者のようにしていなさい。世の富を用いる者は用いすぎないようにしなさい。この世の有様は過ぎ去るからです。」この世にあることについて、そこに具体的な事柄に何の御心があるのか、とか、あま

り真面目に考えないほうがいいのです。御心とは、「それは過ぎ去るのだ」ということです。そういつた中にあるならば、自分が主によって召されているところにいつでも行くことができるし、またそこに留まることも、一日の労苦は一日にし足りると、主を感謝することができます。

そして、「たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。」とっています。肉の欲に対して、私たちが旅人で寄留者なのであり、これらの欲は滅び、過ぎ去るのですから、私たちがそれに自分の思いや体を使ってはいけないということです。ヨハネも同じことを言いました。「1ヨハネ 2:15-17 世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。」そしてペテロは、「魂に戦いを挑む」とっていますね。私たちの思いは、戦いの場所です。「ローマ 8:6 肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。」世においては、体に害がなければそれを行って良いとっています。私たちが基準は違います。思いにおいて、心において、害があるものは避けるべきです。職場において、学校において、これは私たちがいつも、感じていることでしょう。

そしてなぜ、このように肉の欲を避けるべきかを話しているかと言いますと、これから出て来る「善を行うことによって、苦しみを受ける」という教えをするためです。社会において、職場において、また国によって、キリスト者が苦しみを受けます。しかし、それは罪によってただ、罰せられるために受ける苦しみではあってはならない。けれども、善を行うことによって苦しみを受けるのであれば、それは光栄なことであり、主イエスに倣うものだというのであります。

12 節に、「異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい。」とあります。ここでの異邦人とは、もちろん非ユダヤ人のことを指しますが、「神を知らない人々」ということです。パウロが説明しているような世界です。「エペソ 4:17-19・・・もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。」神を知らないことによる無知、また無感覚から来る、キリスト者に対する謗りがあります。ペテロがここで、「何かのことであなたがたを悪人呼ばわり」と言っていることです。初代教会において、キリスト者は中傷を受けていました。キリスト者が他のローマの人々のように偶像礼拝をしなかったので、無神論者であり危険であるとされました。「兄弟」と互いを呼び、神の家族であるとしていたので、近親相姦をしていると言われました。聖餐式について、キリストの肉を食べ、その血を飲んでいるということで、人食をしていると言われました。彼らは監視の目が昼にあったので、夜に集会を行ない、また地下教会でもあったので、それでそうした誤解がさらに増えました。

ただでさえ、このように悪人呼ばわりされるのがキリスト者です。そこで私たちがどのように振る舞わなければいけないのかを、ペテロは教えています。「りっぱにふるまいなさい」ということです。ここでは私たちキリスト者が善であると知っていることを求めるだけでなく、良い行いが異邦人の目にも明らかになるような振る舞いのことを指しています。神を知らない人々でさえ、キリスト者はこれが違うと言わせるような振る舞いです。結局、そのことが、異邦人が「おとずれの日に神をほめたたえるように」なるということです。ここの、「訪れの日」というのは、イエス様が再臨される時のことを話しているのでしょう。つまり、主イエスが戻って来られる時に、裁かれるのではなく、神をほめたたえるようになるということ。つまり、救われるということです。

二月に、香港で東アジア青年キリスト者大会が行われました。日中韓の三国のキリスト者の若者が集まり、主を賛美し、礼拝し、御言葉を聞いて、またグループ毎に交わりをするというものです。そこで、東アジア物語という時間を作りました。東アジアの中で、国をまたがって信仰生活を送っている証しを持っている人々の証しです。北朝鮮からの脱北で中国にいた時に、信仰を持った時のことを証ししてくれた、姉妹がいました。親戚が経営する服の工場で働いていましたが、かなり厳しく、半分いじめに近いことをされていたそうです。そして、韓国から来たデザイナーの人も虐められていました。けれども彼女はクリスチャンでした。陰で、その虐めている経営者のために祝福を祈っている姿を見て、感動したそうです。彼女は熱心に本人に伝道して、その内容はさっぱりわからなかったけれども、彼女の信じている神は本物だと感じたそうです。自分を虐めている人なのに、その人のために祈っているという姿は、信者でなくとも、神を知らない人であっても、立派な振る舞いであることは言うまでもありません。そのことをここでペテロは話しています。

2A 王への尊敬と服従 13-17

13 人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、14 また、悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめるように王から遣わされた総督であっても、そうしなさい。15 というのは、善を行なって、愚かな人々の無知の口を封じることは、神のみこころだからです。

異邦人の中で立派に振る舞うことの一つは、「人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。」であります。それがローマ皇帝のような王であってもそうであるし、王から遣わされた総督であってもそうであります。王は「主権者」であります。今、日本は主権在民の国であり、日本国民が主権を持っていますが、ローマは違います。どんなことも、ローマ皇帝の言いなりによって全てが決められていました。そして、総督はローマ法の執行者であります。悪を罰し、善には報いを与えるように遣わされています。

これが、いかに当時のユダヤ人たちの考えとかけ離れていたかは、66年から始まるユダヤ人反乱、70年にエルサレムをローマが破壊せしめるユダヤ人による反乱が起こったことから良く分

かります。ユダヤ教の中に、熱心党という民族主義者がいて、彼らが反乱を主導しました。ユダヤ人の中には、ローマの圧政によって苦しんでいて、反ローマ感情はものすごく強かったのです。ローマは皇帝を神として、祭司とする異教社会であり、カエザルを祭る宮もあり、数々のローマやギリシャの神々の宮が至るところにありました。その多神教の社会で、ユダヤ人は多神教を礼拝するのを強要されることを頑なに拒みました。

しかし、キリスト者は使徒たちの教えに従って、ローマに対抗することはしませんでした。ローマの神々には仕えなかったし、皇帝を主と呼ぶことについても拒みましたし、その他、不道德とされるものには参加しなかったのです。迫害を受けました。けれども、決して自分たちの信教の自由を守るべく、反ローマの政治活動はしなかったのです。もししていたら、ローマはユダヤ人に対するように、キリスト者たちをローマから追放、あるいは根絶すべく動いていったことでしょう。けれども、キリストに仕えていても、ローマに対抗している訳ではなかったのです。捉えどころがなく、完全に弾圧できなかったのです。むしろ、ローマ社会にとっても良いことを行っていったので、彼らを取り除く理由や根拠が次第になくなっていきました。そしてついに、皇帝自身がキリスト教徒になるに至るまでの影響力を持つのです。つまり、主権者に対して服従したことによって、かえって主権者をキリストの主権の中に入れる支配力を持っていました。「従うことで、支配」したのです。

このように、私たちキリスト者は異教社会の中で、神なしの社会の中でその人の立てた制度に従うということがとても大切になります。もし、他の反発する人々と共に闘うのであれば、立派な振る舞いにはならないことを、ここで明確に話しています。私たち日本国民は、主権在民ですから、もちろん国の方針を批判してよいし、選挙において主権を行使します。しかし、根本的なところで、その指導者が選挙によって選ばれた人であっても、神の立てられた人であり、その制度に従うことが私たちの証しになるのです。反政府的行動はキリスト者の証しとはなりません。

それから、総督について、「悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめるように王から遣わされた」とあります。ローマ 13 章には、こうあります。「13:1-2 人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにとむいているのです。とむいた人は自分の身にさばきを招きます。」権威者がキリスト者でなくとも、その起源が異教であったり、無神論であったりしても、それでもその権威は神が立てました。政府や権威には、悪が地上にはびこるのを抑制する、悪を罰する機能があります。神は、たとえ悪政と言われているものであったとしても、無政府状態を願われません。ですから、反政府的行動がキリスト者にふさわしくないだけでなく、違法行為についてもキリスト者にふさわしい者ではありません。

「それでは、正しさが、正義がこの世に現れないではないか。」と思われるかもしれませんが、それは人間的な考えです。異邦人、神を知らない人々の中には悪があるのは当たり前であり、神を

知らないからそうしたことを行なっているのです。むしろ私たちは従うことによって善を示して、そし
られる理由を亡くしてしまう、「無知の口を封じる」ことが目的なのです。ここでの「無知」は、神を知
らないことに伴う無知です。

2:16 あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷と
して用いなさい。

従いなさい、という勧め、命令を聞けば、それは王に従属するのか、総督に従属するのか？と思
ってしまいます。けれども、13 節には、「主のゆえに従いなさい」とあります。王に従い、総督に従
うのですが、それは彼らに属しているからではなく、主に属しているからです。主イエスに仕えてい
るからこそ、その権威に従っています。イエス様に従うのか、総督の言うことを聞くのかという二者
択一ではなく、イエス様に従うからこそ、その制度に従うということです。ですからここで、それらの
制度に従属している者としてではなく、自由人として行動しなさいとあります。

そして自由なのだから、キリスト者はそれをかえって、神の奴隷として用いる、神の命令に従うと
いう自由を行使するのです。パウロも、「ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互
いに仕えなさい。(ガラテヤ 5:13)」と言いました。そこでは互いに仕える、つまりキリスト者に対す
るものですが、ここでは一般の人々に対して、神の奴隷として従うのだということです。このように、
キリスト者の自由は、権威から自由にされることではなく、神の命令に従うところの自由であります。

2:17 すべての人を敬いなさい。兄弟たちを愛し、神を恐れ、王を尊びなさい。

これは短いですが、大切な教えです。「すべての人を敬いなさい。」とあります。ここには、自分の
好きな人々だけではありません。自分にとって嫌いな人、意見の合わない人、王であれば、打倒し
たい人も含まれます。キリスト者は、相手に対して敬意を持っていることで際立っていないといけま
せん。そして、そこにある霊的生活が、「兄弟たちを愛し、神を恐れ」とあります。兄弟たちを愛する
ということにも、敬いがあり、また敬い以上に、熱く愛して仕え合う、また迫害下にある兄弟を憐れ
み助けることも含まれます。そして神を畏れますが、これは礼拝であります。このことを行なってい
る中で、「王を尊びなさい」という命令があります。教会の中で、国の指導者のために祈り、敬いを
示すことは大切です。また、ここには王は神ではないという意味も含まれているでしょう。ローマ皇
帝は神とされていましたが、キリスト者ははっきりと、彼は人であるとしています。そして、人であっ
ても、神の立てた人であります。皇帝を神として恐れるのではなく、まことの神を畏れ、そして王を
尊ぶのです。

3A 主人への心からの服従 18-20

18 しもべたちよ。尊敬の心を込めて主人に服従しなさい。善良で優しい主人に対してだけでなく、

横暴な主人に対しても従いなさい。19 人がもし、不当な苦しみを受けながらも、神の前における良心のゆえに、悲しみをこらえるなら、それは喜ばれることです。20 罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行なっていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。

ローマ社会は、奴隷制度が主体でありました。奴隷と言っても、その中にもいろいろな位があり、家の管理を任されるような奴隷もいました。けれども、奴隷であることには変わりません。奴隷は、主人の所有物であり、従わないのであれば殺すことさえできました。そのように全く、権利のない存在です。そうした人々に対して、パウロは奴隷から解放されなさいと教えませんでした。むしろ、その召されたところに留まりなさいということを、コリント第一 7 章で教えています。「7:21-22 奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。奴隷も、主にあつて召された者は、主に属する自由人であり、同じように、自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。」私たちは今、何に召されているのか？という悩みがあれば、はっきりしていることがあります。「あなたが、今いるところが召されているところです。」今は、自分はしっかりとその置かれているところに召されているのです。神がそこにおいてくださったのです。だからといって、そこに留まり続けることでもありません。身軽でいるという原則があります。奴隷でなくなる機会があればそうすればいいのです。けれども、基本的にそこに召されているのだというのが、使徒たちの教えです。

そして、ただ従うのではなく、「尊敬の心を込めて主人に服従しなさい」とあります。上辺だけの仕方ではなく、主に従うように従いなさいと、パウロはエペソ 6 章で話しています。ですから、基本的に上司に従うことについて、私たちは悩む必要はありません。もちろん、異邦人、神の知らない人々の間のことですから、そこは尊敬できないことだらけです。泥がいっぱいあります。けれども、泥を泥といって批判したり、あるいは辞めてしまうのであれば、そこに自分が置かれ、証しとなっているという機会を自ら逸することになります。その組織の中に共にいるのです。ですから、心からという言葉が大事であり、尊敬の心を込めて、という言葉が大事です。とにかく、主人を喜ばせる、上司を喜ばせることに努めればよいし、それが御心です。

ペテロはここで、「横暴な主人に対しても従いなさい。」ということを強調しています。そのような主人による虐げの中でも、それでも相手を尊重して従いなさいと命じています。先ほど話した、中国の服の工場で、自分を虐めていた主人のことを祈っていた姉妹の姿がまさにそれです。横暴であればこそ、そこでキリスト者がなおのこと心を込めて仕える機会が増えます。もちろん、その過程で悲しみが増えます。けれども、ペテロ第一 1 章にあったように、そのような試練は悲しみがありますが、信仰が精錬されて、主が来られる時は称賛を受けることになります。ですから、ここで「喜ばれることです」と言っています。

さらにペテロは、罪を犯した時の罰との区別をしています。20 節ですね、ここでしばしばキリスト者である私たちは間違いを犯します。あることで苦しみを受けて、それが自分の就労における怠慢であったかもしれないのに、自分がキリスト者であるから酷い仕打ちを受けたのだと自己憐憫に陥ることです。いいえ、そうではなく、あくまでも善を行なっている中で受ける仕打ちについて、その悲しみにこらえることは、主を喜ばせることになるのです。

4A キリストの模範 21-25

21 あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。

大事な言葉です。「あなたがたが召されたのは、実にそのため」つまり、苦しみのためです。ピリピ 1 章にも、キリストから、信仰のみならず、苦しみも賜物として受けたことが書かれています。ですから、苦しみや試練を受けることは、キリスト者生活の一部であると言って良いでしょう。私たちが選ばれたのは、良い生活ができるためではなく、ここではっきりしないといけませんね、「イエス様のそばにいる」ことであります。何か悪いことが起こると、必ず、自分が何か悪いことをしたからかという原因探しをしてしまいます。いいえ、悪いことをしているからではなく、正しいことをしているからそのようになっているのです。イエス様が十字架の道を歩まれました。その跡についていくのです。自分を捨てて、日々、自分の十字架を背負い、そしてイエス様に従います。

22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。24 そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。

これは、ユダヤ人への使徒らしい表現ですが、イザヤ 53 章にある「主のしもべ」の預言を反映したものです。そこには、この方が悲しみの人であり、病の人であることが書かれています。また、羊が屠り場に連れて行かれるように、口を開かない方であること。仕返しをしない方であること、です。ここでは、まず「罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした」とあります。罪から離れること、また罵るなど、口の偽りがありませんでした。そしてキリストとして、その力をもって脅すこともできたでしょうが、それをせず、「正しくさばかれる方にお任せになりました。」とあります。すばらしいです、裁きを主に任せるのです。

さらに、ペテロはそうした模範以上に、罪を贖われたキリストの姿を書いています。十字架で私たちの罪を追ってくださったので、私たちの罪が赦され、癒されました。私たちが赦されたという確信があるからこそ、私たちは罪を離れることができます。そして、神の正しさの中に生きる自由が与えられます。そして最後の言葉、「キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」

は、靈的なことです。罪が赦されたということです。けれども、マタイ伝では肉体の癒しにこのイザヤの預言が引用されています。したがって、どちらの領域にも適用されている預言です。

25 あなたがたは、羊のようにさまよっていましたが、今は、自分のたましいの牧者であり監督者である方のもとに帰ったのです。

キリストの十字架によって、どのように生きてゆけばよいかわからない、さまよった状態のときに、自分のたましいを牧し、また監督する神のもとに帰ることができました。ペテロは今、イザヤ書53章のことを思いながら、その個所を自分の言葉に書き換えて話しています。

これで、ディスカッションの質問に対する答えが見つかったでしょうか？「1）牧師や信仰の先輩が、献身したいという学生に対して、「まず、しっかりと勉強しなさい。」と言われたら、どう思いますか？その意見は正しいと思いますか？」であります。教会について仕えることと、社会において仕えることは、全く同じように主に仕えます。ゆえに、しっかりと勉強しなさいということは、聖書学校などに行くのと同じぐらい、主に対して仕えることに他なりません。

そして、「2）学校や職場で、先生や上司のしていることが、間違っていると感じる時に、神の御心はどこにあるのでしょうか？」であります。これは自分の信仰の領域ではないのですから、敢えて指摘しなくてよい場合が多いのです。上司に仕えている中で、信頼を得、相手から尋ねて来るのであれば、その時に指摘することはできるでしょう。しかし、自分がそこに置かれているのは、罪を明らかにする預言者ではなく、主のしもべであります。イエス様が、罵られても、罵り返さなかった姿であります。しかし、もし自分の主に対する礼拝、主への献身に対して、正反対のことを命じてきたら、話は別です。それは次のセッションで学びますが、そこは自分の領域というよりも、主の領域です。そこに誰も立ち入らせてはいけません。立ち入るようにさせるなら、それは偶像礼拝になってしまいます。しかし、その他のことは主が何とかしてくださるのです。